鎮魂の旅

三中37回　二宮聖耳

一九四四年一二月七日勤労動員先・愛知県半田市中島飛行機半田製作所で作業中、東南海地震によって建物の下敷きとなり、九六人が死亡、学友にも一三人の犠牲者を出した。この惨事は戦時中とて全国的には故意に知らされていなかったことであった。

六十年たったこの七月三日、我々生き残りの級友四十人が、同市雁宿公園にある殉職学徒慰霊碑を訪れ、一人一人が菊の花を献じその霊を慰め、京都第三中学校校歌を歌った。〝おお三中、その名ぞ我らが誇り〟と天にとどけよと。碑に刻まれてある友人の名を一字一字を撫でる人もいた。その隣にある空襲戦没者を供養する「平和記念碑」にも非戦を誓った。同市榊原市長も参列され、ご挨拶を頂いた。

その後当時の宿舎や工場跡地なども見て廻り、往事に思いを馳せる。鎮魂の旅は予定通りに進行した。

その夜は内海の大東旅館に投宿し旧交を温めた。五十九年振りの友も二名。

この様子は翌日の朝刊に掲載されたが、感想を語ったという友人F・無職と書いてある。かれに聞くと「とくにきかれてないよ。新聞記者はどうやらみんな無職と思い込んでるらしいで」と言うこと、なるほどと納得である。若い記者から見れば彼のような京大名誉教授も、元旭化成社長Y君もみんな年相応に無職と見られたらしいと判明。言われてみればそんなものかいなとわらったのだった。

殉難学徒の名前